

## 所内研修④指導主事講話「幼児から学んだこと」

6月10日(水)に所内研修として、大城美恵子指導主事を講師に、「幼児から学んだこと」と題して講話をいただきました。

幼稚園教諭、教頭、園長としての経験談を踏まえ、実際の事例を取り上げながらのお話しは、心に寄り添った子ども理解の大切さ、個々の子どもにあわせた支援の在り方の大事さ、を考えさせられるものとなりました。

さらに紹介していただいた「日本のフレーベル」と呼ばれ幼児教育の発展に尽くした倉橋惣三氏の「考えつつ行いつつ、行いつつ考えつつ進めた研究である」という言葉は、これから教育研究員の皆さんの検証保育・検証授業への励ましに聞こえました。

## 【講話の概要】

## 1 幼児の姿から学んだこと

- (1) 「みなさん」が通じない→名前を呼んであげよう
- (2) お花のお口はどこ →幼児の目線でものごとを観る
- (3) 大変！金魚が →幼児のやることは意味がある
- (4) ジョウロで床に水やり？→具体的に分かりやすく話す
- (5) 「先頭さんしっかり」 →教師の一言は真剣に考える
- (6) 「僕たちのやること少ない、つまらな〜い」  
→教材研究は必要！  
→主体性に取り組みさせることは大切
- (7) 「もう練習ないの？やったあ！遊んでいい？」  
→行事の在り方と子どもに育てたい力

○幼児の姿を通して、自分の実践を省察することが大切。教師を育てるのは子ども達。幼児の姿をとらえることで、手立てが生まれてくる。

## 2 「日本のフレーベル」と呼ばれた倉橋惣三氏の言葉から

- わたしたちの目にとげはないか。わたしたちの言葉にとげはないか。わたしたちの気分にとげはないか。
- 教育者は詩人と同じだ。驚く心が失せた時、詩も教育も、かたちだけが美しい殻となる。
- 園という時を使っているところに幼稚園の幼稚園たるところがある



写真1 研修の様子



写真2 研修を終えて

## 教育研究員の感想 (研修日誌から)

37年という長い教師生活の中で様々な経験をなされたのだなと思いながら聞かせていただきました。子ども達の日々の生活からのエピソードから、私も最初に受け持った子ども達のことを思いだし、子どもの感性の豊かさにあたたかい気持ちになりました。長らく教師を続ける中で失敗や後悔も多くあったとのことでしたが、そこに気づき、反省し、見直し、教師としての考え方や子どもへのかかわり方を改めていくことの大切さを改めて感じることができました。子どもは様々なことに気づかせてくれ、教師としての私を高めてくれる存在であることに改めて気づき、子どもといられる事に感謝し、たくさんのことを学んでいこうと思いました。これから、どんな楽しい子ども達との生活が待っているのかな、と10月に現場に戻ることが楽しみにになりました。

また、倉橋惣三先生の言葉はこれまで研修会等で何度か出会ってきましたが、深く触れることはなかったので、これから本も読んでみようと思います。(金城さくら)

大城指導主事の「幼児の姿を通して自分の実践を省察することの大切さ、見直す大切さ、改善していくことの大切さを教えてもらった。教師を育てるのは子ども達ではないだろうか。しっかり幼児の姿をとらえることで手だてが生まれてくると考える。」という考え方は、教育の原点だと感じました。

幼児の目線で物を見て、幼児の声を最後まで聞くこと。簡単そうでとても難しいことだと思います。そういう教師の姿勢が多くの支援のアイディアを生み出しているのだと感じました。

私も操作活動を取り入れた活動で授業を展開していこうと思っておりますが、口を出しすぎないように注意しつつもしっかり児童観察し、的確な支援を目指せるよう心がけていきたいと考えています。

(大城厚)

今日的美恵子指導主事の講話の中から、私が印象に残ったことは主に3つあります。1つ目は、「子ども理解」です。目の前の子ども一人一人のありのままの姿を見て、受け入れることが大切です。そこから、手立てが見えてくるので、子どもから学ぶ姿勢が必要です。2つ目に、「子どもたちに共感し、寄り添う教師の姿勢」です。教育相談としての役割も担っていかなくてはなりません。3つ目に、「子どもの主体性を伸ばす」です。子どもたちの考える力をつんでしまっていたなと反省しました。私も結果（正解）を出すことを重視するのではなく、練り合いを通して考える過程を大切にしたい道徳授業をつくっていききたいと思います。

(長門照乃)

小学生の姿から学ぶことが多い私にとって、幼児の姿から学ぶことについてハッとさせられることがたくさんありました。例えば、「花に水をかける＝花びらに水をかける」、「床の板も木できているから水をかける」など、言葉に対して素直に受け止める幼児の姿。美恵子指導主事の話聞きながら、自分の発する言葉の影響力の大きさを改めて知りました。これから検証授業が始まります。授業中に発する教師の言葉にクラスの子どもたちは反応すると思うので、使う言葉や話し方（具体的に話す、声の大きさ・速さなど）に気をつけていこうと思いました。

今日の講話を聞きながら、採用された時の自分の様子を思い出しました。初任ということもあり、子どもや保護者対応で多くの失敗をしました。美恵子指導主事が「若い頃はたくさんの失敗をしたけど、たくさん学ぶことがあった。」と話されていました。そして今、その経験が活かされていると感じることがあります。これからも子どもたちから学ぶことがたくさんあると思います。それを「なぜかな?」「どうしてかな?」という視点を持って子どもたちに寄り添っていききたいです。

(具志堅智美)

まず、自分の子供と反応が似ていると感じました。言葉を知らなかったり、その言葉に2つの意味が見いだせたりすると、意図することではない行動をしてしまうことがあり、具体的にわかりやすく話すことは、幼児だけでなく、大人でもあり得ることなので、これからの授業でも、指示等をするときには、具体的にしていきたいです。

子供のやることには意味がある。これは、今まで何度も出てきた言葉です。それをしっかりと理解してあげ、失敗から学ばせることを意識したいです。

今日、自分が検証授業でも失敗したのですが、生徒に声をかけすぎてしまい、生徒の主体的に学習する機会をうばってしまいました。今までに国立調査官から、沖縄の先生達は丁寧すぎるくらい説明してしまい、しゃべりすぎですと指摘されていたのに、そこから抜けきれない自分がいることを反省しています。

倉橋惣三さんの「考えつつ行いつつ、行いつつ考えつつ」のように、今日やった実践をしっかりと振り返り、自分の課題を次までに改善し、よりよい実践につなげられたらと思います (古屋誠一)